

「技術の進歩の中で陳腐化しない何かを持つこと」

デ ジタル機器やインターネットの発展と共に、コンテンツ作成・発信の分野ではプロとアマの境がますます曖昧になってきている。NHK職員が寄って立つべき「プロ」とは今後も残ってゆけるのだろうか。

東京藝術大学で録音技術を専門に教える亀川徹教授は、元NHKの音声マンでもある。教授という別の立場から、志すべきNHK職員像を語ってもらった。



亀川 徹

東京藝術大学音楽学部
音響環境創造科教授

プロフィール

1960年生まれ。東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教授。録音という行為がもたらす音楽と聴衆をつなぐ役割の社会的・文化的意義を研究。元NHK職員で広島放送局を経て放送センターで番組技術の音声業務を担当。

NHKではたらく制作者像とは

2004年の不祥事に端を発した効率化の波は、番組制作に携わる現場に「要員削減」という大きな傷跡を残しました。加えて急速なデジタル技術の進展に伴い、高価な機材を使わなければできなかつた一昔前の「プロの仕事」は、今や安価な機材を手に入れたアマチュアの人でも実現できるようになりました。

NHK内の「プロ」は、不要となってしまうのでしょうか。NHKを卒業して俯瞰した立場でNHKを見る、東京藝術大学教授の亀川徹さんにお話を伺いました。

不祥事を外から見て

——NHKの制作技術の現場で音声の仕事がされていますが、現在は教育の場でどのようなことをされているのですか。

東京藝術大学に来たきっかけは、今私が教えている音楽環境創造科が2002年に開設された際に、番組と一緒に仕事をした作曲家の方がこの学科の立ち上げの中心になってやられていて、誘われたからです。藝大は元々、演奏家・作曲家や音楽の研究家を育ててきましたが、もう少し幅を広げて音楽と社会をと繋げていけるような人材を育てたいという趣旨で、音楽の企画・マネジメントについてや、録音・音響のことを学べるような学科を作ろうという構想でした。開設から数年かけてカリキュラムを作ってきましたが、現在実際に私が担当しているのは、音楽に関する音響で、その中でも特に録音に関することを中心に教えています。



——2002年に転身されたあと、NHKでは2004年に大きな不祥事がありました。外からみてNHKはどのように見えませんか。

不祥事は本当に残念なことで、他人事とは思えず心配しました。いろいろなメディアで取り上げられ、NHKにとって大変な時代になったと思います。もう一つ思ったことは、外から見るとNHKの皆さんが過剰防衛をし、萎縮してしまっているように感じました。素晴らしいことをやっても内向きにネガティブな方向にすべてが働いてしまっていないかと心配しました。

——2004年の不祥事の後にあった1200人の要員効率化によって技術職場では制作技術の現場は大きな影響を受けました。今、制作技術者の人材育成が課題になっていることについてどう思いますか。

私が所属していた制作技術では、以前から人材が少なくなっていくなかで技術力をいかに確保し継承していくかが大きな課題でしたが、当時心配していたことが現実になっているとしたら、これは大変残念なことです。結局、職場の力とは人がどれだけ能力を発揮できるかということだと思います。NHKが今までこれだけの凄いことが出来たのは、

人材育成がちゃんとしていたからだと思います。自分自身もそうでしたが、新人研修や節目のさまざまな研修、ステツプアップのための研修の制度が充実していることで、これまで多くの人材が育ってきたのではないのでしょうか。これは民放やプロダクションとは違うところです。民放は外部のプロダクションにかなり依存しているため、人材育成が難しいと言われています。音声業務の場合だと現場の重要なことをほとんど経験せずにミキサー^{※1}になったりします。民放の人たちは随分前からNHKのように人を育てなければならぬと言っていました。気付いたらNHKも民放と同じような状況になってきているのだとしたら残念です。

将来の展開を発想できるような人材に

——状況は厳しいなかですが、制作技術者として身につけてほしい必要なスキルはありますか。

大学で教えるようになって特に感じることは、技術的なもののプロとアマの差がなくなってきたことです。技術の進歩によって学生たちでも少しの予算でデジタル機材を購入入できて、録音なども相当のことができるようになりまし。このように学生のようなアマチュアでも簡単にできるようなになったことと、技術職場の方がまわりから言われていることはどこかで繋がっていると思います。プロとして良い音や良い映像を作っていくには、技術的なこと以外何も知らないのでは困ります。プロのエンジニアとして根本的な原理を知り、自分が今扱っている技術にはどのような歴史があるかを知り、その上で将来の展望を持つことが必要です。さらに作品の背景にある様々なことを理解し、例えば演出の考え方や、音楽であればその社会的文化的な背

※1「ミキサー」
ミキシングエンジニア。
機器を用いて複数の音声を
バランスよく混ぜる
人。

景なども理解できる能力を備えた上で、次に何ができるかという展開を発想できるような人材が求められるのではないかと思います。私は大学でそのようなことを教えることを目標としています。それは単なる技術力と言うこととはちよつと違い、技術の進歩のなかで陳腐化しない何かを持つことです。

—— 将来の展望を考えていくことが、自分の存在価値につながるということですね。

そうですね。結局、そこは自分自身で考えていくことです。また、ディレクターが撮影などの技術を身につけて、一人で素晴らしいものを作ることもあります。一人だけではできないものも必ずあります。作品作りはいろいろなスタイルがあつて良いはず。ドラマなどの大がかりな作品はチームワークがあつてこそ、より素晴らしいものができるのです。専門家という役割は無くならないし、残らないといけません。発想は、大勢の人が影響しあいながら出てくるものと、たった一人で考えるものとは大きく違います。

スペシャリストを技術職場でどう作っていくのかを考えるには、今やつていくことに固執するのではなく、スペシャリストが必要とされる場所にどう存在価値を見いだしていくのが重要となるのではないのでしょうか。ハイビジョンの次の展開を考えるなど、現場の発想をフィードバックしていくことはNHKが昔からやってきた成果だと思えます。これが無くなつてしまうとNHKの存在価値がなくなつてしまうと思います。

—— 制作技術現場では余裕がなくなつてきて、それが悪影響となつている実感があります。

それはあると思います。人材育成などは職場の余裕のあるなしが直接影響してくるものだと思います。昔は定期的な番組を観る時間を作り、みんな意見を出し合いました。これはとても重要なことで、自分たちで番組についていろいろ考え、意見を出し合つて生まれるものは非常に大きな力となります。人の作った作品に対して意見を言うためには、自分の中でも基準を持たなくてはなりません。この基準を作ることが良いトレーニングになります。確かに時間がないと出来ないというジレンマがありますが、番組を作るなどクリエイティブなことをやる人にとつて、作つてそれを批評することは一つの輪をつくることになります。作りつぱなし、観つぱなしでも駄目で、一つの輪として自分たちで自己完結しないと駄目だと思います。また批評を行う場合、ネガティブな批評だけではなくポジティブな批評とのバランスが必要です。良いものを認め合う、そのなかでちゃんとしたスペシャリストも育つのではないかと思います。

私も授業で学生の作品について聴く時間を重要な位置付けとしています。学生同士で自分たちの録音を聴き、言いたいことを言い合う。とんちんかんな質問やうまく説明出来なかつたりもしますが、それを繰り返すことによりみんなのレベルが上がつていきます。聴いて批評することは「作る人」にとつて重要です。よくそんな時間がないと言われるますが、組織的にそういう時間を確保した方が良いと思います。

——人の作った番組に対して批判めいたことを言うことは相当な自信がないとなかなか言えないですよね。

日本人は苦手ですよ。そこをいかに工夫して言えるようになるか、先輩がやっていることに對して言い出しにくかったりしますが、そこで自由に言えることが良い職場環境、制作環境なのだと思います。

「ものが違つ」とどこまで言わせられるか

——若者がテレビ離れをしている、という話を聞くことが増えました。学生と接する機会が多い中、どのように感じていきますか。

今の学生はテレビを持っていない人が多いです。ただ、テレビを全く見ないわけではなく、子供の頃、家で観ていたけど大学に入って1人暮らしになって、テレビよりPCを使う時間が増えたということです。彼らが何を見ているかと言うとインターネットでYouTubeを観たりしています。昔だったらテレビしかありませんでしたが、現在は選択肢が圧倒的に増えてきています。テレビが今後どうなるかと考えると、おそらく今までと同じであることはもうないと思います。インターネットとどう差別化して生き残っていくか。テレビは無くならないと思いますが、今までどおりの規模で死守できるかどうか、これは非常に難しいと思います。

——NHKも経営計画の中でテレビだけではなくPCなど通信分野へも展開する方針を打ち出しています。

いわゆる通信分野へのコンテンツ供給をやっていく必要はあると思います。これから難しくなっていくのは、プロとアマの差がなくなり、かつてマスへの発信は個人では難

しかったものが、今は誰でも簡単にネットで投稿ができ、しかも面白いものにはエネルギーがどんどん注がれています。いろいろな作品がある中で、NHKの作っているものは「ものが違つ」とどこまで言わせられるのか、ここが肝心だと思います。そこで何が差別化できるか。エン지니어としてそこにどういうことを発揮できるかが問われてくることになるでしょう。例えばサラウンド^{※2}だったりスーパーハイビジョン^{※3}だったりという新しい技術は、一つの確固たるものにはなりますが、それだけではアマチュアと差別化していくことは難しいものです。実際どうしたらいいのかは今後、研究していかなくてはいけないと思っています。

プロとアマの関係はレコード・CDといった音楽産業で先行して起きています。ネットでアマチュアがつくったものがどんどん流通しており、プロのレコーディングの必要性はなくなってきたのでは、と言われています。こういった状況に映像文化や放送業界も差しかかかってきたと思います。今、音楽産業で苦しんでいるのは大手のレコード産業で、逆にこれまでビジネスチャンスがなかった小さいレコード会社が健闘しています。これまでの大手レコード会社のビジネスモデルが破綻しているのです。この図式を放送に当てはめた時に、NHKにとっては厳しいことですが、大きな放送局が今後どのように生き残っていくかが課題となると思います。

それでもドラマなどの番組を作っていくノウハウは、アマチュアでは簡単には得られないものです。映画産業はテレビが主流となったときに下降しましたが今でもしっかりと残っています。テレビはこれまで社会的にも大きな影響力を与えたメディアであり、今後少しだけインターネットに

※2「サラウンド」

音を聴く人を取り囲むようにスピーカーを設置して、左右や後ろからも聴こえる立体音響方式。日本のデジタル放送では5・1chサラウンドを放送することができる。

※3「スーパーハイビジョン」

現在のハイビジョン放送の16倍の高精細映像。NHK技術研究所で開発中。

道を譲ることになるかもしれませんが、何らかの形でずつと残ると思います。その後メディアの将来がどうなるか、今は分かりませんがプロとしてのニーズは決して無くなりはないと思います。

インタビューを聞いて

先のことには誰にも分からない。そんな中で我々が必要とされ続けるためには、私たち自身が「技術の進歩の中で陳腐化しない何かを持つこと」が必要です。

終始にこやかに語る亀川さんでしたが、その話の核心に亀川さんの想いが透けて見えたように感じました。

私はそのような技術者の卵をつくるために、いまここにいます。

もしかしたら、亀川さん自身も「陳腐化しない何か」を求めて自らの進むべき道を決断したのではないのでしょうか。そしてそれは、番組を制作することや、それによる自己実現と同じかそれ以上に充足感のある仕事なのかもしれないと、ふとうらやましくも感じました。

報告 技術系列 中橋 孝雄